




日本インドネシア友好年2008  
新たな半世紀に向けて

# 2008 年夏インドネシア訪問報告書

立命館ジャワ島中部地震災害復興支援  
学校再建プロジェクト



2008年9月5日(金)～9月19日(金)  
ジョグジャカルタ特別州バントウル県  
パジャガン郡グオサリ村カラキジョ地区  
SD Muhammadiyah (ムハマディヤ小学校)

立命館大学国際部 国際協力学生実行委員会 

## 目次

1. 団体説明	4
2. 訪問までの経緯	5
3. 現地活動	8
4. 各プロジェクトの報告	11
. Approach Logically Project 教育分野	11
. Bousai sama sama Project 防災分野	17
. Kesehatan Project 保健分野	25
5. SD Muhamadiyah 授業参観	33
6. 参考資料	38
Bousai sama sama Project 結果	38
Kesehatan Project 調査結果	42



## 注釈

SD・・・「Sekolah Dasar」の略。インドネシア語で「小学校」の意味。

UGM・・・国立ガジャマダ大学の略称で、正式には「Universitas Gadjadara」。本報告書内では、学生を指して用いてもいる。

RT・・・「Rukun Tetangga」の略。行政組織の末端に区分されるいわゆる「町内会」のこと。政府はRT・RWを公認の組織と認めているが、準行政的なもので国家装置ではない。主な役割はRTによって違いはあるが、会費を徴収し災害や亡くなった人の家族へ弔慰費、家族カードの作成、住民の相談などがある。

PKK・・・正式名称「Pembinaan Kesejahteraan Keluarga」。インドネシアの地方における、いわゆる婦人会である。英語では「Family Welfare Development」と書き、「家族の福祉活動」と訳されることが多い。地方の政府とつながっており、意見が行政に通るようになっている。主な活動内容としては、健康などに関する勉強会を月に1度行ったり、乳幼児の健康診断を「ポシアンドゥ（POSYANDU）」と言うコミュニティレベルの保健施設で行ったりしており、家族や地域をより良くすることを目的としている。ちなみに、ポシアンドゥとは、Pos（場所）Pelayanan（サービス）Terpaduの略称で直訳すると“1つの場所に集まるサービス”となる。

アリサン・・・「Arisan」と書く。日本で言ういわゆる講、若しくは頼母子講。定期的に仲間が集まり、一定額のお金を出し、その全額をもらえる当選者を抽選で決めるものだが、定期的に行うことで参加者全員が順番にももらえるようにしている。アリサンは伝統的な行為であり、日常的な習慣となっている。商人・農民・女性会・子ども、など様々なアリサンが存在する。まとまった金額を手に入れられるので、高額なものを買ったり、不測の事態の保障になったりする。ただし、アリサンが一番の目的は金銭を受け取るのではなく、コミュニティへの参加・社会と個人をつなぐ役目となることである。しかし、社会の多様化が進んできた今、特に大都市ジャカルタではアリサンは経済的機能から社会的・親睦的機能へとってきている。

ダサ・ウィスマ・・・インドネシア語で「Dasa Wisma」。Dasaは「10」、Wismaは「家」という意味で、アリサンの種類の名前である。月に一度行われ、ジャワ島に多いという。

ポス・ロンダ・・・「Pos Ronda」と書く。RTごとに設けられている集会所のことを指す。住民で組織された夜警団は、ここを拠点に活動しており、Rondaは夜警という意味である。

ムソラ・・・「Mushola」と言い、ムスリムが礼拝を行う「モスク」の小規模なもの。

マントリ・・・インドネシア語で「Mantri」。地域コミュニティに住む保健所に勤めているスタッフのことで、有料で診察したり薬を渡したりしている。

# 1. 団体説明

## はじめに

スマトラ島沖地震及びインド洋大津波（2004年12月）の被災地に対し、立命館学園は復興支援を表明した。その一つが、深刻な被害を受けたスリランカ及びインドネシアの教育再生を目標とする「学校再建プロジェクト」である。この学園をあげた取り組みに共鳴し、学生有志が集まり結成したのが立命館インド洋大津波災害復興支援事業「学校再建プロジェクト」学生実行委員会である。私達は設立当初から学園と連携し、支援対象校とその地域への支援・交流活動や国内広報など幅広い活動を展開してきた。学園はジャワ島中部地震（2006年5月）で被災したインドネシア・ジョグジャカルタ特別州・パントウル県においても小学校を再建し、実行委員会は同年9月の学園側の調査に同行した。学校再建事業は校舎が再建された2007年3月までに一応の完了をみたが、学生の立場から地域コミュニティの復興・発展のために活動をしていきたいと考えた。そこで、団体名称を「立命館大学国際部国際協力学生実行委員会」に改正した上で、学園が再建した小学校を活動拠点として、その周辺地域の活性化や住み良い地域づくりに尽力したい、という想いで、現在では「地域コミュニティ開発」という視点から継続的な国際協力活動を行っている。

## これまでの活動経緯（インドネシア・ジョグジャカルタ特別州・カラキジョ地区にて）

時期	プロジェクト内容
2006年9月	調査
2007年3月	子ども達との交流、多様性教育、教育ワークショップ
2007年7月	事前予備調査
2007年9月	教育の質向上のための模擬授業、防災ワークショップ、女性コミュニティ調査
2008年3月	教育ワークショップ、防災マップ作り、女性コミュニティ調査

## 活動方針

- ・対象地域の子ども達に対する教育協力活動
- ・海外の対象地域コミュニティの問題解決、持続的な発展のきっかけとなる活動
- ・対象地域（国内・国外）の「今」を伝える（世界の子ども達と日本の子ども達をつなげる）

2008年4月に団体の愛称として「CheRits」と定めた。

この由来はインドネシア語で、C...Cari（さがす）、h...hangat（あたたかい）、e...enak（たのしい）である。

## 2. 訪問までの経緯

私達は、特定の地区での継続的な活動を目指しており、前回までの訪問の反省点などを踏まえて活動内容を計画している。ここでは、前回の春季訪問の反省点を簡潔にまとめた後、今回の夏季訪問に向けての取り組みや、プロジェクト作成過程について報告する。

### 2008年夏季インドネシア訪問の反省点

#### 準備期間の反省点

- ・プロジェクト数(5つ)がメンバー数に対して多かった
- ・防災マップ作成の練習等の時間が不十分だった

#### 現地活動での反省点

- ・活動内容が多く、現地協力者への負担が大きかった

#### その他

- ・プロジェクト実施後の評価方法が確立されておらず、客観的なプロジェクトの評価ができなかった

### 訪問に向けての取り組み

#### 勉強会

毎週1回、会議時間内において実施した。前半には『キャパシティ・ディベロップメントに関する事例分析 - キャパシティ・ディベロップメントの観点からの防災コミュニティを主体とした災害対応能力の強化に向けて』(JICA)という資料について取り上げた。勉強会の形式としては、複数回に分けた内容を各担当者が報告し、これへの質疑応答をしていくというものである。

後半では、活動に関係あるテーマを各自担当者に選択してもらい、形式は同様のまま行った。その際のテーマは「初等教育と開発、援助」、「PTSDとその回復(災害時をふくめて)」、「ラマダーンあれこれ」である。

#### 初夏合宿

今年度新たに入会したメンバーが例年以上に多く、メンバー間の交流・理解促進を図るため、また当団体のことをより知ってもらうため、6月中旬に合宿を実施した。合宿のコンテンツを決める際にはグループ対抗のコンペ形式を採用し、プロジェクト立案・作成スキルの向上を目指した。

#### 専門家の意見を取り入れる

教育分野において過去にも協力して頂いている京都市内にある小学校の教師の方々より、教育プロジェクトの内容についてアドバイスを頂いた。また保健分野では、名古屋大学医学部保健学科の教員に講師としてお越し頂き、現地調査において大事なことや手法につい

て助言を受けた。これらを通して得られたものは、貴重な意見としてプロジェクト内容に反映させた。

## プロジェクト作成について

### 各プロジェクトの目的を検討

2008 年春季活動時に実施した教育、防災、女性の 3 分野のプロジェクトの目的をもとに、各分野における活動意義について検討を行った。

教育：この分野では「SD Muhamadiyah の教師」が「日本の教育手法を参考としつつ授業の質の向上を図ること」で、目的である「子ども達により良い教育を提供すること」を目指してきた。プロジェクト対象者について、家庭（保護者）や地域社会という視点を取り入れてはどうかという意見もあったが、やはり教育の専門家である小学校の教師方にアプローチをした方が継続性の観点から最適であるとの結論となった。また、“より良い教育”の定義については様々な要素が含まれることを整理・確認した上で、教育分野においてまだ私達がアプローチできることがあると感じ、引き続き活動していくことを決めた。

防災：過去 2 度のプロジェクトでは、目的のために防災の“意識”や“知識”の向上を目指して活動してきたが、春季活動の結果、地域の方々の防災に関する“意識”や“知識”には個人差があること、以前のプロジェクトを受けての反応・効果が少なからずあること、が判明した。今後もこれらの向上に着眼し防災分野の活動を続けることに可能性を見出した。また、住民の方々の参加度合をより高めたプロジェクトを行い、防災に関する自発的な意識を高められるようにすることが必要だと考えた。そこで、「コミュニティとしてカラキジョ地区にあった災害対策をできるようになってもらう」ことを目的として活動を続けていくこととした。

女性：これまで地域のネットワークを強化していくために、女性を切り口にアプローチしようとしてきており、春季活動時は、「女性の意見が地域社会に反映されるシステムをつくる」「様々な問題や不満を女性同士が共有できる場をつくる」ことを目的とするアプローチを検討するために調査を行った。そのため、女性の組織である PKK に着目していたが、PKK は地区の女性を統括するような系統だった団体ではなく、地域の保健や福祉の向上のために活動する団体であることが判明した。よって、地域ネットワーク強化のために女性を切り口にアプローチすることには限界性があるという結論に至り、今回は女性分野での活動は行わないこととした。

### 新分野の検討

これまでの活動経験から現地で得られた情報をもとにして、カラキジョ地区のさらなる発展に寄与できるような新たな活動分野を模索した。案としては、保健衛生、識字率向上、

自然環境、貧困改善という分野が候補に挙がった。「実行委員会の活動方針との整合性」「効果の大きさ」「負の影響」の観点からこれらを比較検討した結果、保健衛生の分野が最も適当であると判断した。そこで、活動目的を「カラキジョ地区の人々に、より健康的な生活を送ってもらおう」とし、新分野として設けた。

### プロジェクトの目標を検討

教育・防災・保健という3つの分野ごとに設定した目的をもとに、今回2008年夏季にプロジェクトを実施することによって達成を目指す“目標”について議論した。教育と防災については過去に実施したプロジェクトのフィードバックをもとに、また保健分野については現地でメンバーが感じた問題意識などをもとに、カラキジョ地区の現状に見合った目標を決定した。

### アプローチ方法を検討

各プロジェクトの目的・目標を達成するために適したアプローチ方法は何なのかについて検討した。

保健については、まずは現状を知ることが必要であると判断し、調査を実施することに決めた。

### 練習

いずれのプロジェクトでも必要となるファシリテーションスキルの向上や、適切なヒアリング調査を行えるようにするため、担当者による講座を開いたり、繰り返し本番に見立てた練習を行ったりした。

各プロジェクトの詳細については、11ページ~を参照されたい。

### 訪問までの流れ(2008年春季訪問以降)

- 4月 春季活動についてのフィードバック
- 5月 春季報告書が完成
  - プロジェクト<目的の検討>
- 6月 勉強会を開始
  - 初夏合宿
  - プロジェクト<新分野の検討、目標の検討>
- 7月 プロジェクト<アプローチ方法の検討>
- 8月 勉強会(保健について)
  - プロジェクト<アプローチ方法の検討、練習>
  - 直前合宿、最終確認

### 3. 現地活動

#### 訪問概要

##### 期間

2008年9月5日(水)～9月19日(日)15日間

##### 訪問先

インドネシア国ジョグジャカルタ特別州バントゥール県パジャガン郡

グオサリ村カラキジョ地区

SD Muhamadiyah (ムハマディア小学校)

##### スタッフ

立命館大学国際部 国際協力学生実行委員会 (CheRits)

##### Students

	Name	Major	Position
高山 千晴	Chiharu Takayama	国際関係学部 3 回生	統括責任者
藤田 恵里	Eri Fujita	法学部 3 回生	統括責任者補佐 Kesehatan Project 責任者
相原 久美子	Kumiko Aihara	文学部 2 回生	Approach Logically 責任者
武藤 直人	Naoto Muto	国際関係学部 1 回生	Bousai sama sama Project 責任者
古賀 あすみ	Asumi Koga	文学部 2 回生	
野原 浩嗣	Koji Nohara	産業社会学部 1 回生	
山口 達也	Tatsuya Yamaguchi	国際関係学部 1 回生	
澤田 晃弘	Akihiro Sawada	政策科学学部 1 回生	
妹尾 有里子	Yuriko Senoo	国際関係学部 1 回生	

##### Manager

藤山 一郎 先生	Mr. Ichiro Fujiyama	立命館大学国際機構長補佐 Team Leader
----------	---------------------	-----------------------------

協力者

ガジャマダ大学 ( UGM )

Students

Name	
Roy Pardomuan Lumban Raja (ロイ)	R Muhammad Isa (イサ)
Wahyu Handayani (ワヒュー)	Dania Sakti (ダニア)
Dame Rinda M. (ダメ)	Dyah Martanti Indah Pratiwi (ディヤー)
Arum Wardani (アルム)	Idha Peni Wulandari (イダ)
Farista Wahyu O. (リスタ)	Galuh Kusumaning Tyas (ガルー)
Rima Octaviana Yusmawati (リマ)	
P Nirwana Dewi (デウイ)	
Emma Rahmawati Fatimah (エマ)	
Made (マデ)	
Arum Vitasari (フィタ)	
Bayu Septian Wipriyant (バユ)	
Ade Sri Utami (アデ)	

表の右側のメンバーにはOB・OGとして補助的な役割を果たしてもらった。

Manager

Dr. Tatang Hariri	タタン教師	文化社会学部日本語学科教授
Dr. Sri Pangastoeti (Tutik)	トゥティ教師	文化社会学部日本語学科教授

### 全体スケジュール

日時	午前	午後	その他(宿泊など)
1 9月5日 (金)	関空 08:30 集合 関空(KIX)11:00 発 GA883	デンパサール(DPS) 16:40 着	【Lisata Bali 泊】
2 9月6日 (土)	デンパサール(DPS)12:50 発 ジョグジャカルタ(JOG)13:00 GA253	UGM 学生と MTG (15~18時)	【MMUGM 泊】
3 9月7日 (日)	UGM 学生と MTG (9~11時半)	現地の方と打ち合わせ (14~16時)	

4	9月8日 (月)	SD Muhamadiyah 授業参観	企画：Kesehatan Project 内容：SD の教師・PKK リーダー へのヒアリング	
5	9月9日 (火)	プロジェクト打ち合わせ	企画：Approach Logically Project 内容：プレゼン、ワークショップ その後、UGM 構内見学	
6	9月10日 (水)	休養	企画：Kesehatan Project 内容：保健所での調査、地区住民 調査	
7	9月11日 (木)	プロジェクト打ち合わせ	企画：Bousai sama-sama Project 内容：プレゼン、ワークショップ	
8	9月12日 (水)	企画：Kesehatan Project 内容：保健所での調査、地区住民 調査	買い出しなど	
9	9月13日 (土)	UGM 学生とフィードバック	UGM 学生とフィードバック	
10	9月14日 (日)	ボロブドゥール遺跡見学	sama sama party(17時半～)	
11	9月15日 (月)	休養	ジョグジャカルタ (JOG) 13:50 発 デンパサル (DPS) 16:00 着 GA254	【Ubud Village 泊】
12	9月16日 (火)	観光	観光	
13	9月17日 (水)	観光	観光	【Harris Kuta 泊】
14	9月18日 (木)		デンパサル (DPS) 24:15 発	【機内泊】
15	9月19日 (金)	関空 (KIX) 8:00 着 GA882		

## 4. 各プロジェクトの報告

### . Approach Logically Project

(論理力のもつ可能性について考えよう)

#### 教育分野

企画責任者 相原久美子

#### 企画背景

2007年7月の事前調査の際に見学した教師の授業方法

2007年夏季のプロジェクトでの児童達の反応(穴埋めやメモ欄をうまく使えていなかった)

2008年春季のプロジェクトにおける教師の授業への取り組み方と普段の生活についての調査内容

これらの観察・調査を通じて、教師が児童に知識をつけさせるということを重要視していて、児童が自ら考える時間が確保されていない、という印象を受けた。そこで、知識はもちろん大事だが、知識をつけるためにも児童が自ら考えることが重要であることを知ってもらうために、今回のプロジェクトを考えた。

#### 目的

カラキジョ地区の子どもたちによりよい教育を提供する

#### 目標

教師に児童自ら取り組むための授業手法について考えてもらうことを通して、「自ら考え取り組むための力」に関心を持ってもらう。「関心を持ってもらう」とは児童が自ら考え取り組むことを重要視しているという考え方があることを認識してもらう・考えてもらうという意味である。

#### プロジェクト概要

日時 9月9日 13:00~15:00

場所 SD Muhamadiyah

対象者 SD Muhamadiyah の教師



## プロジェクト内容

### 1.プレゼンテーション

日本で行われている児童が回答を導く上で理由、根拠を考えられるような授業手法についてデモンストレーションを通して紹介する

<紹介した授業手法>

#### ・授業ルール

ハンドサイン...賛成のときパー、反対のときグーなど児童が手の形によって自分の意思を表現するという手法

話型...質問に対して児童が答える時に「私は だと思えます。なぜなら だからです。」という形を決めておくという手法

#### ・ワークシート

「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「なぜ」などの項目を分けたワークシート  
問題と回答だけでなく、その過程（理由や根拠）を書かせるワークシート

### 2.ワークショップ

紹介した日本の授業手法について教師と一緒に話し合う

### 3.まとめ

自ら考え取り組むための力の重要性について伝える

## 結果

ワークショップを通してSD Muhamadiyahの教育現状に関してわかったこと

#### 【現在の SD Muhamadiyah の教師の取り組み】

高学年

- ・児童同士で話し合わせている。
- ・児童達に自分で考えて問題を解かせ、分からなかったら質問させる。
- ・視覚教材を使う、授業で使う絵などを準備している。
- ・理科でワークシートを使って理由を考える授業をしている。
- ・地震があったらどう行動すべきかを児童に考えさせることをしている。

低学年

・選択肢のあるワークシートを使っているが、理由を書く欄は設けておらず、ワークシートはグループワークのために使用している。

#### 【児童が問題について自ら考えることに関する、教師の考え方】

高学年

- ・児童達に理由を考えさせる授業は行っているが、理由を考えることがなぜ大切かはわからない。

## 低学年

- ・「プロセス」より「結果」を重視している。
- ・文字などの読み書きを覚えることを重視している。
- ・教科によっては、答えだけで十分である。
- ・宗教は、小学校のレベルでは「信じること」を重視しているので理由を考える必要はない。

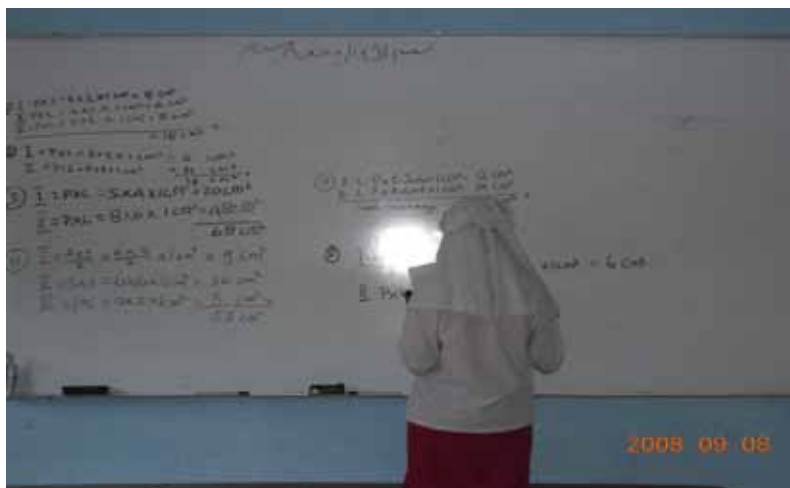
## 授業参観を通してわかったこと

### 高学年

- ・5年生には何回説明しても理解できない子がいる。
- ・高学年でも、自分の意見や理由を発表できない子もいる。(友達と同じ答えを言う)  
〔教師が現在行っている授業工夫〕
  - ・理科や数学の授業で、指のサイン(日本と違い1本指など)やワークシートを使って、児童達に自分で考えさせる授業をしている。
  - ・男女混合のグループワークをしている。
  - ・理科や数学の授業で、毎日教科書を読ませている。
  - ・少しずつ項目を絞って、どこで、誰が、などと答えさせている。

### 低学年

- ・挙手で発表させると「ハイ、ハイ」と他の児童が手を挙げる真似をする児童もいる。
- ・発表時にキャンディーをあげると喜ぶ。  
積極的に発表させるために、発表した児童にキャンディーをあげたり、点数をプラスしたりしている。
- ・児童の能力差を埋めるために、理解の早い児童と理解の遅い児童を同じグループに入れ、教えあうという形をとっている。
- ・問題が解けた子は早く帰らせ、解けない子には extra time を設けて繰り返し教えている。



## 考察

### 妥当性

本プロジェクトにおける「妥当性」は、設定した目標がカラキジョ地区の教育現状に対するアプローチとして正しかったのかどうかを測るものである。

目標の設定やプロジェクトの方向性はカラキジョ地区の教育現状に合致していたと言える。訪問中に SD Muhamadiyah で授業参観をしたところ、高学年に対して一方的な授業を教師が行っているということは見受けられなかった。むしろ教師は、児童に自ら考えさせることを授業に取り入れようとしていて、すでに自ら考え取り組むための力という考え方については認識していることがわかった。UNICEF が教育手法に関する技術協力を行ったことが一因である考えられる。また、低学年ではワークショップの中で「プロセスを考えることは大事だと思う」「1,2年生の児童に理由を考えさせるのは難しい」などの発言から、この考え方は認識しているが、児童の年齢的に授業に取り入れることは難しいと考えていることがわかった。以上の理由から、冒頭の結論に至る。

しかし、目標設定のレベルは低かったと考える。高学年の教師は「児童自ら考え、問題に取り組む」ことに関して既に関心を持っていたので概念的なものではなく、もっと具体的な授業手法を伝えるべきだった。低学年の教師も「児童自ら考え、問題に取り組む」ことが大切だという漠然とした認識はあったが、授業に取り入れようとはしていなかった。そのため、論理力の重要性をきちんと伝えるとともに、低学年の児童に合わせた簡単な授業手法を伝えるべきであった。

### 有効性

本プロジェクトにおける有効性は、プロジェクトを通しての教師に対する効果の内容・程度を測るものとする。

私達が設定していた目標に対する効果としては、元々関心があり取り組んでいる教師に関しては特に変化はなかった。一方で、関心はあるが低学年の児童には年齢的に難しいと考えていた教師が最終的に「色のついた紙を使ってそれを解決する」や「日本の考え方を真似したい」と発言したことから、児童に理由を考えさせる授業について検討してもらえたと言える。

また、私達が想定していなかった効果として、

- ・「児童が意見を言いやすくするためにハンドサイン（賛成・反対）を使いたい」と言っていたことから、単純に日本の授業方法を取り入れたいと思ってもらえた
- ・グループワークだけでなく、個人でワークシートを使って考えることも大切だと知ってもらえた
- ・「ワークシートに絵（アニメ）を取り入れたい」と言っていたことから、新しいワークシ

ートの改善方法を考え出してもらえた

- ・『できる子どもとできない子どものギャップがある』という問題に対して最終的に「ワークショップを通して、できる子どもとできない子どものギャップの埋め方がわかった」と言っていたことから、解決方法を考えだしてもらえた。
  - ・『子どもが恥ずかしがる』という問題に対して、教師自身にワークシートを使って改善できると考えてもらえた（改善策を提示できた）
- といった効果がみられた。

### 効率性

本プロジェクトにおける効率性は、訪問前の準備からプロジェクト実施まで、効率的に時間を使えたかどうか（時間がうまく使えたかどうか）を測るものとする。

プロジェクト実施にあたり、「目標の意味合いやコンセンサスがなかなか取れなかった」という大きな反省点がある。これにより、プロジェクト全体を見通すことができず、訪問前の準備時に莫大な時間がかかり、多くの会議外の集まりや会議外でのプロジェクト内容の変更や決定、訪問直前のプロジェクト内容の変更などを引き起こした。それらの部分は効率的に時間を使えたとは言えない。

また、プロジェクト実施中、参加者が遅れて来た場合にグループ分けや名札などの対応がうまくできなかつたり、ワークショップでは積極的に質問を受けた日本の教育や授業手法に関する知識不足があった。これらは、訪問前の準備に関わってくるが、名札を事前にきちんと準備し、質問されると思われる内容を調べておく必要があると感じた。

一方で、効率的にできた点としては、劇の内容・原稿の作成や練習を1週間で仕上げることができたことが挙げられる。

さらに、ワークショップ中、通訳が2人いた場合に、教師のインドネシア語を日本語に訳す人、ファシリテーターの日本語をインドネシア語に訳す人と役割分担を明確にし、教師と円滑にワークショップができた点は効率的であったと言える。

### 自立発展性

本プロジェクトでいう自立発展性というのは、「これからも児童が自分で考え取り組むことができるような授業を教師がしていくかどうか」、「私達が想定していなかったプロジェクトによる効果を教師が授業に活かしていくかどうか」ということである。

**「これからも児童が自分で考え取り組むことができるような授業を教師がしていくかどうか」**

低学年の教師の場合、児童が答えを言うことや覚えることを重視していて、児童に回答の理由や根拠を考えさせることに難しさを感じていたため、ワークショップ内で児童に自

ら考えさせるという発言もあったものの、自立発展性は低いのではないかと考えられる。ただし、ある英語の教師は積極的にワークショップに参加し、「色紙を使う」という「低学年に対して難しい」という問題に対する解決策をあげていたので、この教師については自立発展性があると考えられる。高学年に対しては、既に児童が自ら考え取り組む授業がなされているので、今後も同様に続いていくと言える。しかし、本プロジェクト以前から行われていたので、このプロジェクトにおける自立発展性にはあたらぬ。

また、アラビア語の教師はワークショップにおいて終始、「低学年には答えだけで十分」と言っていたので、宗教の教師はその教科の性質により、自立発展性はない。

### 「私達が想定していなかったプロジェクトによる効果を教師が授業に活かしていくかどうか」

低学年の教師は「意見を言いやすくするための賛成、反対のハンドサインが楽しそうなので取り入れたい」と言ってくれた教師が多くいたり、具体的なワークシートの活用方法を一緒に考えることができたので、この部分では自立発展性はあると言える。

また、高学年の教師は、教師方が今問題としている点に対して、紹介した日本の授業手法で解決できる点があるとされたが、実際授業に取り組むかどうか判断できないので自立発展性は不明である。

### 課題

今回のプロジェクトを通して、日本の教育と比較すると、私達が教育分野においてアプローチする課題がいくつか見つかった。

- ・教育については、保護者や地域コミュニティが教師に任せっきりで、保護者の中でも教育に対して意識の差がある

本当に学校教育に親が必要なのかを今後検討する必要あり

- ・立ち歩く児童がいたり、教師が個別的に指導しているときに他の児童が遊んだり、教師が児童をまとめられていない
- ・児童が授業に集中していない
- ・授業に参加していない児童がいる
- ・授業開始時間、あいさつなどの規律がない
- ・教科書を全員が持っていない
- ・コの字型の机の並び方がよくない
- ・教師の中でもまだまだ教育に対して意識の差がある

今回のプロジェクトでは目標のレベルを低く設定しすぎた点、教師が問題と考えている分野に直接アプローチできなかった点などの改善すべき点を残した。今後はこれらの改善点を元に的確にアプローチしていきたいと考える。

## . Bousai sama sama Project

### (カラキジョ地区防災リーダー養成 Project)

#### 防災分野

企画責任者 武藤直人

#### 企画背景

2007年夏季の Bousai Project では、カラキジョ地区の地域組織のリーダー層に対して、自身の組織の強みを活かした災害対策を考えてもらった。しかし、2008年春季の Bousai Project 事後調査の結果より、各組織のリーダー間で防災への意識に差があるとともに、実際に何らかの災害対策を行うというところまでは達成されていないことが判明した。今回は、今後地区の防災を担っていくリーダー層の人々に、協力し合って災害対策を行うことの重要性を感じてもらうためのプロジェクトを実施した。

#### 目的

コミュニティとしてカラキジョにあった災害対策ができるようになってもらう

#### 目標

以下の重要性をプロジェクト参加者に感じてもらう

- ) 個人ではなく協力して災害対策を行うこと
- ) 防災リーダーとしてカラキジョ地区の災害対策を率先していくこと

#### プロジェクト概要

日時 : 9月11日

場所 : SD Muhamadiyah

対象者 : カラキジョ地区のリーダー層

RT リーダー 6名

PKK リーダー 3名

サレ氏 (カラキジョ地区リーダー)

SD の教師 4名

高学歴者 3名





## 考察

### 妥当性

本プロジェクトの妥当性については、「設定した目標はカラキジョ地区が必要とする防災の方向性に沿っていたのか」、また「その設定したレベルは適当だったのか」という観点から考察を行う。

### 目標 1 について

\*目標 1 は『個人ではなく、協力して災害対策を行うことの重要性を感じてもらおう』であるが、「個人でなく協力して」とは、「一人ではなく周りの人と」ということと、「組織間の連携」という 2 つの意味を含む

#### PKK リーダー

- ・「バントゥル県の PKK がカラキジョの PKK に災害対策のレクチャーをした」
- ・「PKK と RT リーダー、住民が協力して援助（おそらく物資）の分配ができる」
- ・「青年団、RT リーダー、PKK リーダーが協力して活動できる」

以上の発言内容に加えて、カラキジョ地区内では、それぞれのアクターがそれぞれの役割を理解していると言えることから、協力して災害対策をすることができていると言える。したがって、協力して災害対策を行ってもらおうという方向性は正しかったと考えられる。

しかし、『個人ではなく、協力して災害対策を行うことの重要性を感じてもらおう』という目標自体のレベル設定が低かった。

#### RT リーダー

- ・「LPMD（村落開発審議会）という政府の下部組織と宗教指導者、RT リーダーが集まっている」（教師の発言）
- ・「PKK と RT リーダー、住民が協力して援助（おそらく物資）の分配ができる」

以上の発言に加えて、PKK と同様に、当然のこととして暗黙の役割分担ができていることから、協力して災害対策をすることができていると言える。したがって、協力して災害対策を行ってもらおうという方向性は正しかったと考えられる。

しかし、『個人ではなく、協力して災害対策を行うことの重要性を感じてもらおう』という目標自体のレベル設定が低かった。

#### SD の教師

##### 【カラキジョ地区内に協力の範囲を限る場合】

学校で避難訓練を行っているという事実があるが、カラキジョ地区内の他の組織と協力して災害対策を行っているという発言はなく、避難訓練が地区の人々と協力したものであるかは分からない。

また、避難訓練などの学校における災害対策がカラキジョ地区においてどのような位置付けになっているかは不明である。

したがって、組織間で協力して災害対策ができているかどうかは不明であり、妥当性については不明である。

#### 【カラキジョ地区外との協力も含める場合】

カラキジョ地区外の NGO などと協力しているという事実があることから、協力して災害対策することができていると言える。したがって、協力して災害対策を行ってもらおうという方向性は正しかったと考えられる。

しかし、『個人ではなく、協力して災害対策を行うことの重要性を感じてもらおう』という目標自体のレベル設定が低かった。

#### 目標 2 について

##### PKK リーダー

PKK リーダーの「(心のケアのため)モスクに子どもを集めて、一緒に遊んだりしている」  
「PKK は協力して食べ物を作ることができる」などの発言から、活動内容は詳細であり、地域の災害対策において積極的であると考えられる。したがって、防災リーダーとしての意識があると考えられ、防災を率先してもらおうという方向性は合致していたが、そのレベル設定が適切ではなかったと言える。

##### SD の教師

「学校で教師が防災に関するレクチャーを行っている」という発言があるが、実際にカラキジョ地区の防災を率いていくという意識があるかどうかは不明である。教師方の大半は地区外から通ってきているため、地区全体の防災を担うのは難しいかもしれない。

しかし、学校という“ハード”としての可能性と、これまでに 2 回防災に関するプロジェクトを行っていること、教師方は防災に関する知識を持っていると考えられることなどから、防災リーダーになってもらうことを目指すという方向性はあっていたとともに、目標も妥当であったと言える。

##### RT リーダー

RT リーダーによる「RT リーダーは政府の情報を伝えることができる」などの発言はあるが、具体的な内容は分からない。一方で、自宅の軒下に防災に関するポスターを貼っているリーダーもいる。よって、RT リーダーが防災リーダーとして既にカラキジョ地区の災害対策を率先していく意識があるのか否か一概には言い切れない。したがって、妥当性については不明とする。

\*高学歴者（目標 1、2 とともに）

高学歴者本人に関する災害対策は出されておらず、それぞれの目標について重要性を感じているかどうかは分からなかった。プロジェクトとしては、目標 1『個人ではなく協力して災害対策を行うこと』に関して、高学歴者としての知識や影響力を用いて周りの人と防災を行ってってもらうことを目標としていたが、その妥当性は読みとることができなかった。また、目標 2『防災リーダーとして災害対策を率先していくこと』については、実際にどのような防災リーダーになってもらうのが曖昧なままプロジェクト作成を進めてしまったため、測ることができなかった。したがって、高学歴者についての妥当性については不明である。

### 有効性

本プロジェクトの有効性では、「ワークショップに参加した人がワークショップを通じてどのような利益を得たか」を測ることとする。このとき、「プロジェクトの目標の方向性に即した効果」、「プロジェクトの目標の方向性とは異なる効果」という観点で考察する。

#### プロジェクトの目標の方向性に即した効果

- ・「怪我をする」という災害時の問題に対して、色々な人が協力する具体的な解決案を考えだしてもらうことができた
- ・最初は「高学歴者以外の人に伝えても分かってくれない」という発言があったが、最終的には「高学歴者以外の人にも伝えていく」という発言があった

#### プロジェクトの目標の方向性とは異なる効果

- ・RT リーダーや高学歴者というそれぞれの立場に関係なく、「防災」について考えてもらえた
- ・“参加者自身”で「防災」について、考えてもらうことができた
- ・防災マップを見ながら、防災においてカラキジョ地区にあるもので何が役立つのか、どのようなものが使えるのかを再認識してもらうことができた
- ・ワークショップを行いながら、自分やほかのアクターがカラキジョ地区の防災においてどのような役割を負っているのかを再確認してもらうことができた
- ・高学歴者がワークショップに加わったことで、活発な議論を行うことができ、より深く防災について考えてもらえた

### 効率性

本プロジェクトの効率性では、訪問前の準備から実行までにおいて、どのような「改善すべき点」と「良かった点」があるのかについて考察する。

### 改善すべき点

プロジェクトの準備期間において、高学歴者の立場が曖昧なままであったなど、目標の確認がしっかりできていなかったという点が挙げられる。また方法を考える上で、知識や経験が不足していたため、会議外で話し合ったり変更することが多く、訪問直前まで変更点が多かった。

現地では、UGM 学生に内容を説明する際にマニュアルに漢字が多く、UGM 学生にとって負担が大きかったと思われる。プロジェクト実施中では、参加者が遅刻や早退した場合に、例えば遅刻した参加者をどのグループに割り振るのかなどを瞬時に判断することができなかった。ワークショップ後のまとめの場で司会者がコメントするために事前に内容を把握しておこうとしたが、司会者とファシリテーター間で上手く連絡がとれず、司会者が各グループで出た意見にコメントができなかった。さらにまとめの際、参加者の背後に多くのメンバーが立ち見をしていて、参加者に威圧感を与えたかもしれない。

プロジェクト内容に関しては、まとめの際に 3 本の「防災の木」を 1 本の木に貼り合わせたが、参加者にとってはその意味を感じにくいものであった。また、カラキジョ地区以外に住んでいる教師が話しにくそうであった。

### 良かった点

準備時において、毎回の会議に担当者がレジュメを作成してもっていったので、会議が効率的に進められた。また、ワークショップ実施中に、「防災の木」があることで、話し合いがしやすくなった。

### 自立発展性

本プロジェクトの自立発展性では、「有効性で出た効果がカラキジョ地区で継続していくかどうか」を測ることとする。

### 『「怪我をする」という災害時の問題に対して、色々な人が協力する具体的な解決案を考え出してもらうことができた』という効果に対して

UGM 学生とのフィードバック時に出された意見に、「この対策が実際に行われる可能性は低いのではないか」がある。その根拠としては、物理的に金銭的な余裕がないこと、ジャワ島ではもう大きな地震は起きないという認識があること、RT リーダーは年配であり考え方が固定化されていてそれに変化は望めないこと、が挙げられていた。また私達は、カラキジョ地区では地震から 2 年経った後も、未だ再建されていない建物があるなど、金銭

的に余裕があるとは言えないのではないかと推測した。

一方で、ワークショップ中の様子としては、参加者同士が活発に議論しているという印象を受けた。

したがって、色々な人が協力する具体的な解決案を出してもらうことはできたが、実際に金銭の使用を伴う災害対策は行われたいのではないかと推測されるため、自立発展性は低いのではないかと考える。

『「最初は「高学歴者以外の人に伝えても分かってくれない」という発言があったが、最終的には「高学歴者以外の人にも伝えていく」という発言があった』という効果に対して

この発言に関しては、ワークショップの様子から、本当に実施するつもりがあったのではなく、こちらに配慮しての発言だったのではないかと推測される。

したがって、実際に災害対策が行なわれていくのかどうかは不明であり、自立発展性については不明である。

『ワークショップを行いながら、自分やほかの対象者がカラキジョ地区の防災においてどのような役割を負っているのかを再確認してもらうことができた』という効果に対して

私達がアプローチする前から、カラキジョ地区においてはそれぞれのリーダーが自分の組織がカラキジョ地区でどのような役割を背負っているのかを知り、またそれを行っているという前述の「暗黙のすみ分け」が確立され、機能していると考えられる。

したがって、そのすみ分けはこれからも継続されていくのではないかと考えられるため、自立発展性はあると考えられる。

『RT リーダーや高学歴者というそれぞれの立場に関係なく話し合ってもらうことができた』という効果に対して

今回のワークショップのような話し合いが今後も開かれるかは分からない。また、カラキジョ地区内で暗黙の役割分担がされているのなら、その時点でそれぞれが“立場”を意識していると考えられる。ワークショップにて、確かに立場に関係なく発言しているように感じられたが、一方で発言内容は立場を意識した発言が多く、自立発展性については低いと考えられる。

“参加者自身”で「防災」について、考えてもらうことができた

参加者の発言の中に、「RT リーダーと LPMD という政府の下の組織と宗教指導者が集まっている」というものがあるなど、「防災」とそれに関係したトピックに関して自分達で考えてもらうことは、すでにある程度確立していると考えられ、それは継続していくのではないかと考えられる。したがって、自立発展性はあると考えられる。

## 課題

本プロジェクトを終えて、カラキジョ地区の防災における課題がいくつか挙げられる。まず、RTリーダーの間でも、防災に関する意識に差があるということである。それは、防災に関するポスターを持っているリーダーがいる一方、プロジェクトのワークショップにおいて意欲的でないリーダーがいるということからわかる。

次に、災害が起きた際、「食糧がなくなることが問題である」という意識をもっている人がいる一方、それが問題点では無い、という考えを持っている人がおり、問題意識について差があることもわかった。よってこのことは、災害対策ができているかどうかという違いにつながっているのではないかと考えられる。

さらに、実際に地震が起きた際にはガソリンが不足するとの発言があったことや、また実際に私達が地区を歩いた際の様子から、建物がレンガ作りであること、道が舗装されていないという事実から考えても、インフラの面で問題を抱えていることが分かる。



## . Kesehatan Project (Primary Health Care に関する実地調査)

### 保健分野

責任者 藤田恵里

#### 企画背景

これまでの私達の活動の中で、カラキジョ地区内には主だった保健医療施設がなく、また学校で保健教育が行われていないことが観察された。他方、インドネシア保健省によると、2008年現在これまでに確定された鳥インフルエンザ患者135名中、110名が死亡しており、世界最多である。

実行委員会の活動理念である「より多くの人々が笑顔・勇気・希望を共有し合えるような国際社会の実現」を目指す上で、カラキジョ地区の人々がより健康的な生活を送るための活動を私達が行うことが必要なのではないかと考えた。そのため、まずはカラキジョ地区の保健衛生状況に関して実態調査を実施することとした。

#### 目的

カラキジョ地区の人々に、より健康的な生活を送ってもらう

#### 目標

目的のために活動する上で必要な、保健衛生に関する情報を収集する

#### プロジェクト概要

日時 9月8日、10日、12日  
場所 8日 SD Muhamadiyah  
10日 保健所  
12日 カラキジョ地区の住民宅  
対象者 SD Muhamadiyah の教師3名  
PKK リーダー3名  
医療従事者5名  
カラキジョ地区の住民13世帯



カラキジョ地区は人口約800人である。調査した13世帯は、住民の方に案内してもらった家庭である。

なお、本調査においては、対象世帯の同意を得た上で実施している。

## 調査内容

### 1. 学校での保健の取り組みについて

仮説 1：SD での保健の取り組みが行われていないのではないか？

項目番号	1 - 1	1 - 2	1 - 3
項目	保健教育の有無	保健管理	児童の健康に対する意識と知識
対象者	SD の教師	SD の教師	SD の教師
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保健に関する授業を行っているのか、またその内容</li> <li>・保健教育に関する取り組みを行っているのか、またその内容</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の健康を守るために教師が学校で行っていることはあるか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の健康を守る上で何が重要だと思っているのか</li> <li>・現在、児童の健康を守る上でどのような問題があるのか</li> </ul>
調査方法	インタビュー	インタビュー	インタビュー

### 2. カラキジョ地区の対策設備・アクセス

仮説 2：カラキジョ地区の医療設備・アクセスが住民にとって十分ではないのではないか？

項目番号	2 - 1	2 - 2	2 - 3
項目	距離的アクセス	経済的アクセス	医療への信頼度
対象者	医療従事者	医療従事者	医療従事者 PKK リーダー
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地区内の医療施設の有無</li> <li>・地区外の施設への距離</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設の利用に関する費用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>保健所の現状（施設、診察科、病床数、設備、スタッフの数）</li> <li>医療に対してどう思っているのか</li> </ul>
調査方法	事前調査	事前調査	見学、インタビュー



### 3. 情報発信の有無と住民の情報理解

仮説 3：病気の予防方法に関する情報の発信を、地域組織や医療従事者が行っていないのではないかと？

病気の予防方法に関する情報を、住民が理解していないのではないかと？

項目番号	3 - 1	3 - 2
項目	伝達方法・内容	受信者の内容理解
対象者	医療従事者、PKK リーダー	住民
調査内容	・各種疾病に関する予防方法を住民に伝えているか。伝えているならば、その内容と伝達手段	・保健所、病院、PKK から、病気の予防や対策、注意について連絡がくるか。連絡がくるならば、どのような内容か
調査方法	インタビュー	インタビュー

### 4. 家庭における保健対策状況と病気

仮説 4：家庭において、健康を守るための対策が行われていないのではないかと？

項目番号	4 - 1	4 - 2
項目	保健対策について	病気への認識
対象者	住民、PKK リーダー	住民、医療従事者
調査内容	・病気の予防のためにどのようなことをしているのか。行っている場合は具体的な内容を、行っていない場合は原因について。	・カラキジョ地区で流行っている病気の種類、治療方法
調査方法	インタビュー	インタビュー

### 5. 地域組織（PKK）の状況

仮説 5：PKK が、地域の人々の健康のための活動を行っていないのではないかと？

項目番号	5 - 1	5 - 2
項目	組織の取り組み	リーダーの意識
対象者	PKK リーダー	PKK リーダー
調査内容	・保健について、どのような取り組みをしているのか	・地域の健康について何が必要だと思っているか ・住民の健康を守る上でどのような問題点があるか
調査方法	インタビュー	インタビュー
比較対象	UGM 学生へのアンケート	(主観判断)

## 6. 基本統計

項目番号	6 - 1	6 - 2	6 - 3
項目	改善された水源の利用状況	医療従事者数	乳幼児死亡率
対象者	医療従事者	医療従事者	資料調査
調査内容	水源はどのようなものがあるのか	医療従事者は何人いるのか、その種類	
調査方法	インタビュー	インタビュー	資料調査

### 調査結果

各項目の詳細については、巻末を参照

#### 仮説についての検討結果

仮説 1：SD で保健の取り組みが行われていないのではないか？

検討結果：保健教育・管理は十分に行われていない。

その原因として教師の知識・意識が関係しているかどうかは不明。

仮説 2：カラキジョ地区の医療設備・アクセスが住民にとって十分ではないのではないか？

検討結果：距離的アクセスは問題はない。経済的アクセスは保険証制度がうまく機能しているかどうかは不明だが、当初想定していたよりは十分に制度・環境が整っていると見える。医療への信頼度に関して、多くの住民が保健所・病院へ通院したことがあることから、信頼度があるものとする。また、UGM 学生の意見などより、施設自体も他のインドネシアの地域と比較して十分に整っていると見える。

仮説 3：病気の予防方法に関する情報の発信を、地域組織や医療従事者が行っていないのではないか？病気の予防方法に関する情報を、住民が理解していないのではないか？

検討結果：PKK、医療従事者共にレクチャーなどを通じ情報発信を行っている。しかし、その内容を実践している住民は少数であった。その差異が生じた要因としては、情報が発信されていてもうまく伝達されていない、または住民の意識が低いということが推測される。

仮説 4：家庭において、健康を守るための対策が行われていないのではないか

検討結果：ほとんどの家庭で、「栄養のある食事を心がける」や「家やその周りの掃除をする」などの対策が行われていた。対策の内容が伝統的な方法に拠る家庭もあつ

たが、「効果がわからない」「文化・慣習との関連性が考慮される」との理由から、伝統的な方法に関する判断はしかねる。

仮説 5：PKK が、地区住民の健康のための活動を行っていないのではないか

検討結果：ポシアンドゥやミーティングなど様々な活動を行っている。健康診断など主要な活動には多くの住民が参加していると言える一方で、レクチャー内容を実施していない家庭もあることから、その活動が住民側にとって十分なものかどうか、適切なものであるかどうかは不明である。

## 考察

### 妥当性

本調査において、妥当性とは「仮説・問題点の設定は現地の状況とどの程度合致していたか」を測るものとする。ここでいう現地の状況とは、教師・PKK リーダー・医療従事者の活動目的、住民が現在抱えている問題、を指すこととする。

教師・PKK リーダー・医療従事者の活動目的と合致していたか

〔教師の活動目的との整合性〕

本調査は「教師は児童の健康を守り、健康を守るための教育を行う必要がある」という考え方を前提としていた。では、この考え方は教師の活動目的と合致していたのだろうか。調査をすすめるなかで、教師が子供への教育を目的とし、授業を行っていること、体育の授業の中で怪我や病気への対処方法を教えていることから、教師が児童の健康を守る必要があるという考え方は現地の状況と十分に合致していたと言える。

〔PKK の活動目的との整合性〕

本調査は「PKK は女性を中心とする地域住民の健康を守る必要がある」という考え方を前提としていた。調査を進める中で、PKK が、地域住民の健康を守るための活動を行っていたこと、保健所のスタッフなどから直接レクチャーを受けていたこと、などがわかった。これらより、PKK はカラキジョ地区で地域住民の健康を守る上で重要な役割を担っていることがわかった。したがって、前述のような前提条件は現地の状況と十分に合致していたと言える。

〔医療従事者の活動目的との整合性〕

保健所のスタッフを中心とする医療従事者は、医療行為にとどまらず健康促進のためのレクチャーや健康診断、相談会などを行っていることがわかった。これは、本調査を行う前提であった「医療従事者は地域の人々の健康を守る上で、医療行為以外の活動も充実させる必要がある」という考え方に合致するものであると考える。

以上のように、地区の健康を守る上で重要な役割を担うのではないかと想定した三者に

関して、いずれも健康に関する活動を行っていることがわかった。特に医療従事者や PKK の活動内容については、住民側の認識も高かった。これらより、三者の活動目的と今回の課題設定は妥当性が十分にあるものとする。

#### 住民が現在抱えている問題

健康に関する問題は、住民にとって優先すべき問題の 1 つだったのだろうか。まず、住民のニーズを正確に把握することはできていない。したがって、住民にとって優先すべき問題であると断定はできないため、本調査が現地の状況に完全に合致したものであったとはいえない。しかし、調査をすすめる中で健康に関する様々な問題点が浮かび上がり、『他の問題に取り組む方が住民のニーズに合致している』という状況はなかった。このことから、優先順位は不明だが、少なくとも健康に関する問題はカラキジョ地区が抱える問題の 1 つとすることができるのではないだろうかとする。

#### 有効性

本調査において、有効性とは「仮説・問題点を検討する上で、調査内容は適当であったかどうか」を測るものとする。

5 点全ての仮説において、ある程度の検討ができた。ここでいう「ある程度」とは、仮説に対してある答えを導き出すことはできたが、その原因や関連する事柄に関する判断はしかなるものがあったという意味である。例として仮説 1 を取り上げる。仮説 1 では、「保健教育・管理が十分に行われていない」ということができたが、その原因が教師の知識・意識不足によるものなのか、地域のサポート体制の不備によるものなのか、定かではない。このように、仮説検討において、イエスかノーか、その選択をすることはできたが原因の究明、詳細の把握にはいたらなかったと言える。

#### 効率性

本調査において、効率性とは「調査準備にかけた時間・費用や、現地の人・UGM 学生に対してかけた負担は、質・量ともに適正であったか」を測るものとする。

特筆したいのは、調査内容の共有に関してである。どのような目的で、どのような対象者にどのようなことを調査するのか。紙面や会議で何度も確認をしつつ準備を進めたが、訪問直前や訪問後の調査結果をみていると、調査の意図を完全に共有することができていなかった。調査は、その意図を共有してこそ効率の良い、ムダのない調査を実施することができる。その点で、今回は責任者が一方的に意図を確認するスタイルをとってしまったため、全てのメンバーと意図の共有をはかることができなかった。これが、今回効率的な準備をできなかった一番の要因である。

## 課題

以上の調査結果より、保健衛生に関して以下の 4 点を課題とする。以下、カラキジョ地区の諸状況が把握できている課題から順に並べる。

### 問題 1：学校での保健教育・保健管理が十分できていない。

1-1、1-2、1-3 の調査結果をみると、日本と比べて子供に直接的な指導を行う機会が少なかったり、保健室が有効利用されていないことがわかる。他のインドネシアの小学校と比較しても、保健教育の内容が充実しているとは言えない。特に、虫歯に関してカラキジョ地区の現状と対策を他の地域と比較すると、子供に対して直接的な指導を行う機会が少ないといえることができる。原因は、教師の意識なのか、教師の知識不足なのか、地域のサポート体制が整っていないからなのかなど色々と推測できるが定かではない。いずれにしろ、学校での保健教育・保健管理について十分ではないといえることができる。

### 問題 2：親が子供の健康管理を十分にできていない

PKK は親に対して虫歯予防を中心とした様々なレクチャーを行っている。また、住民への調査より、小学生以下の子供がいる家庭において、家族の健康を守るための取り組みをしていることがわかった。これは、PKK のレクチャーなどを通し親が子供の健康管理に気をつけているといえることができる。

一方で、教師への調査において、「弁当の衛生状態が悪い」「児童の健康を守る上で必要なことは両親が正しい知識を身につけること」だという発言がみられた。つまり、親は子供の健康管理にある程度気をつけてはいるが、弁当のようにあらゆる面に関して気を配ることができていない現状にあると言える。原因が親の知識・意識不足なのか、PKK や教師の指導不足なのかは不明だが、親が子供の健康管理を十分にできていないといえることができる。ただし、弁当がどのようなものなのか、また教師の発言の真意がどのようなものであったのか測ることはできておらず、明確に「問題である」と言い切ることはできない。

また、親への調査行っていないこと、親に対する教師の意識調査を行っていないことからこの問題に関わる諸状況は正確に把握できておらず、この点からも「問題である」と明確に言い切ることはできない。

### 問題 3：地区内にゴミが多く、衛生上好ましくない状態になっている

地区見学の結果、どの RT でも道端や水路にゴミが溜まっていた。ゴミが主にビニル袋などが多かった。Dasa Wisma による清掃活動が行われていることとかね合わせて考えると、清掃という意識がないわけではない。しかし、ゴミが地区内に放置されるとデング熱の発生源であるボウフラが発生する可能性も高くなり、将来人々が今よりも病気にかかるかもしれない。つまり、清掃活動を行っているにも関わらず、地区で将来感染症が発生する可能性のあるかもしれない状態で地区の環境が保たれていることが問題であると言える。た

だし、インドネシアの他地域で、同じ程度の経済規模の村との比較を行っていないため、インドネシア全土でみたときにカラキジョ地区の衛生状態が問題であると断定することはできない。また、カラキジョ地区の現在の衛生状態が、健康的な生活を送る上で悪影響を及ぼす原因となると言い切ることはできない。さらに、清掃活動の目的など詳細もわかっていない。今後、これらの点も考慮した上で問題点について再考する必要があると言える。

#### **問題 4：PKK や医療従事者らが伝えた、病気の予防方法がうまく伝わっていない**

PKK や医療従事者のレクチャー内容と、住民が家庭で健康に関して取り組んでいる内容を比較してみると、レクチャー内容をあまり実践していないことがわかった。特に、虫歯に関して、PKK や医療従事者がレクチャー内容として挙げているにも関わらず、今回調査した家庭ではどの家庭も取り組みをしていなかった。さらに、住民への調査より、PKK や保健所から、虫歯・感染症・妊婦・乳児の病気予防の方法に関する情報を得ていると答えた人は少なかった。(2-3 調査結果参照) これらの病気は、PKK や保健所が予防方法を発信しているといっていたものである。以上より、PKK や医療従事者らが伝えた、病気の予防方法がうまく伝わっていないと言える。ただし、レクチャーの方法や住民側のレクチャーへの参加度合などもわかっていない。病気予防の方法に関して豊富な知識をもっている情報発信者側が伝達方法について工夫を凝らす必要があるのではないかという意見もあるが、それが本当に原因の伝え方に問題があるのか、住民の理解が足りないのかは不明である。

今回、人々の健康に関するプロジェクト実施に先駆けてカラキジョ地区ではじめて保健調査を行った。その結果対象者の活動や人々が病気予防対策に関する情報などを得ることができた。そして、次回に向けてカラキジョ地区の保健に関する問題点を考察することもできた。では、保健衛生問題が、人々にとって優先的に取り組むべき内容なのだろうか。カラキジョ地区には、私達の気づいていないような問題が山積しているのではないだろうか。この問題は、今後考えるべき重要な問いである一方で、住民のニーズを正確に把握することは難しいため、現時点ではこの問いに答えることはできないと思う。しかし、少なくとも今回得た情報をもとに、健康という問題に関して私達ができることが必ずあるはずだ。「保健衛生問題が、人々にとって優先的に取り組むべき内容なのか」という視点を常に忘れず、立ち止まり考えながらも、まずは私達の資源を最大限に活かし、今わかっている問題から一つずつ取り組むべきではないだろうか。

## 5. SD Muhamadiyah 授業参観

今回の訪問においても、教育分野で SD Muhamadiyah に対するアプローチを行なった。その「Approach Logically Project」実施前日に授業参観をさせて頂いた際に、見たもの、得た情報は多く、今後の活動に活かすことのできるものである。

そこで、授業参観の様子を「授業参観時の授業内容」と「授業参観時にメンバーがそれぞれ気づいたこと」という2つの観点で報告する。

日時 9月8日(月)午前

訪問先 SD Muhamadiyah (ムハマディヤ小学校)

### 授業参観時の授業内容

#### 低学年

学年	教科	内容
1年	PKN (国民の授業)	教科書に取り組む
2年	理科	・動物(やぎ、とり、猫、象など)の体のしくみについてグループワーク(各グループが1つの動物について考える)→発表 ・植物について前のホワイトボードに絵を描きながら実、葉、根、花、種などの部分の説明 児童は自分のノートに書き込む 最後に授業内容の簡単な小テストを実施(教師の口頭設問の後、白い紙に児童が答えを書く)
	インドネシア語	
3年	算数	筆算の問題 まず例題を教師が黒板に書き示し、児童に問題を解かせる 例) $235 + 682 - 332 = \dots$ といった大きな数字の計算 $725 - (278 + 326) = \dots$ といった( )を先に計算する方法



### 高学年

学年	教科	内容
4年	アラビア語	
	社会	自然（地形）について
5年	社会	インドネシアの歴史を教科書にそって学んでいた
	生物	動物の絵とワークシートを用いて動物の体の仕組みについてグループで話し合うという授業内容でした
6年	算数	複雑な図形の面積の求め方 折り紙をつかって面積を求めるグループワークを行っていた
	理科	動物の分類、動物の特徴について（理科）

気付いたこと 低・高学年ごとに集計しているため、内容は必ずしも一致していない。

### 【児童の様子】

#### 低学年

- ・児童の授業への集中力にはばらつきがあり、かなり注意力が散漫になっていた子もいた。  
ある子は、私達に対して警戒していたのかもしれないが、ノートをあまりとらず、足をブラブラさせていた。
- ・テスト中、こそこそと話し合っって答えを直していた。
- ・グループごとに座っていた。
- ・立ち歩く児童もいる。
- ・児童達はみんな楽しそうに見えた。（実際、勉強は楽しいと言っていた）

#### 高学年

- ・私達がいるということで最初はこちらをチラチラ見ていたりしていたが、基本的にはみんな集中していたように思う。
- ・高学年だからか児童は落ち着いていた。（教師が困っている様子は見られなかった）
- ・児童は非常に熱心に取り組んでおりサボっている児童はいなかった。
- ・中にはまったく授業に参加していない子もいた。
- ・日本と同様、例題を考える際の教師の問いかけに対して、“理解が早い児童”が主に答えていた。
- ・答えを聞かれる前に発言をしてしまう児童があり、全く発言できない児童がいた。
- ・教科書を持っている児童と持っていない児童があり、教科書がない児童は問題をノートに移していた、2人で1つを見ていた  
\*教科書が個人のものが学校のものかは不明
- ・グループ決めの際の児童の反応は男の子が恥ずかしがるなど、日本と同じだと思った。
- ・男の子と女の子混合のグループは女の子がメモを取り、男の子は傍観していた
- ・男女は別々に座っていた。

- ・男女ともに仲がよさそうだった。

### 【教師の様子】

#### 低学年

- ・教師は教室の大きさを考えるとかなり大きな声で話をしていたように思え、少々威圧的だったような気がする。
- ・教師は児童達を落ち着かせて授業に集中させることに忙しそうであった。
- ・授業にあまり集中していない児童がいたが、教師は「2年生だから遊びながらでも歌を歌いながらでも良い」と言っていた。

#### 高学年

- ・人数が少なかったこともあってか、教師と児童の身体的な距離がとても近く、教師も一緒にビデオを見ていた。
- ・6年生ではあったが、やはり賑やかな様子で教師は児童のやんちゃな様子に困っているようだった。

### 【教師の児童への対応】

#### 低学年

- ・落ち着きのない子や立ち歩く児童には注意をする。
- ・発表をする子が恥ずかしがっていたら「もっと大きな声で」と注意をする。
- ・児童が正しい答えを言えたら拍手をする。
- ・児童が間違った答えを言ったら怒らず、答えを言わず「ちょっと違うかな？考えてみよう」と促す。
- ・猫についてのグループ発表が終わった後に「猫とトラは似ているけど同じかな？」という質問や、「足は4本って言っていたけど手はなんのためにあるのかな？」「動物は4本だけど、虫は何本かな？」などといった発展的な質問もいれていた。
- ・テストの時は教師が児童1人ひとり近くに行きどどのくらいできているかチェックする（間違った答えを書いている児童に対しては上記のように指摘のみで、答えは教えない）
- ・テストをやりたいがらない子に対して「やらないと卵（0点の意だと思われる）だよ～？」とうまく刺激を与える。
- ・理解が遅い児童に対しては、教師がみんなに問題を解かせている際に直接隣にいて教えていた。
- ・個々で問題を解く際にやる気のない児童に対しては教師が児童の横に座り、付きっきりで指導していた。その間、他の児童達は教室内を暴れまわっていた。
- ・発言できない児童達に対して教師が特別何か工夫しているようには見えなかった。

#### 高学年

- ・教師は色々なグループに行きアドバイスをしていた。

- ・宿題をやっていない子が怒られていた。
- ・ほとんどグループワークだったので教師による解説が少なかったという印象を受けた。
- ・グループワークのグループ決めの際、やむを得ず女の子が 1 人になってしまったグループでは男の子が女の子に「お前は立っておけ」などと仲間外れにしている場面を目にした。この状況に対し、教師は何も注意しなかった。



### 【工夫されている点】

#### 低学年

- ・理科では、カラダの部位などを説明する時に絵を使って視覚的に楽しいようにしていたと思う。
- ・授業の最後に授業のまとめとして問題を解かせることをしていて、ここで授業中の集中度の違いが反映されていたように思う。
- ・教師が児童に意見を求めていた(例えば「動物にはどのようなものがあるかな?」など)。児童は次々と意見を出していた。
- ・授業の後半は、児童に自分の好きな植物と動物の絵を描かせていた。児童は楽しそうにやっていた。

#### 高学年

- ・ビデオを使って勉強するということがだったので、普通に講義形式の授業に比べて児童達にとってとても面白い教材であったと思う。
- ・児童達でグループになって考えるということを取り入れていたので、児童が考えやすい環境はつくられていると思った。
- ・絵を描いたり工夫している、さらには児童が自分のノートを書く時間、自分が書いたものを見直す時間をきちんと取っていた。
- ・テストの内容は、1 問目は授業内容「植物の部分は何がありますか?」に関する問題、2 問目は自由問題(授業でやっていないが児童が考えて書けるような応用問題)「種を持っている植物は何がありますか?」という問題であった。

- ・グループワークを取り入れていて、DVDを見るだけでなく、見ながらわかった事をメモさせる。
- ・日本と同様、教師がまず例題を解いて、次に児童に問題練習をさせていた。
- ・理科の授業では、グループワークをしていた。その際には、各グループでワークシートを用いており、そのワークシートの枠組みは教師が黒板に書いたものを児童が紙に写すといったものであった。
- ・教科書の答えを復唱させる
- ・グループ（5人位）に分かれて設問に取り組んだりもしていた
- ・教師はきちんと答えにいたった過程を児童に書かせたり、説明をしていた。
- ・教師は教科書を使わず、独自のやり方でやっているという感じだった。
- ・グループに分かれてワークシートを使ってヒンドゥー教の歴史を学んでいる。「いつ」「どこで」などを教科書の中から探して表に書く欄があった。
- ・調べたことを教室の前で発表する 教師が補足説明 ワークシートを壁に張って皆で共有という流れだった。
- ・教師が児童に質問がないか聞いていた。
- ・教師は黒板に写真を貼って、遺跡の説明をしていた。
- ・教師は最後に「遺跡を守るためにはどうすれば良いか」を児童に投げかけたが、意見が出なかったため、宿題になり各自が家で考えてくることになった。
- ・ほとんどグループワークだったので教師による解説が少なかったという印象を受けた。
- ・ラマダン中で眠くなってしまうため（3時には起床）、独立記念の歌を歌っていた。

## 【その他】

### 低学年

- ・授業前のあいさつがある。
- ・机の配置は、黒板を3方向（両サイド、後ろ）で囲むような形であった。
- ・児童達はジャワ語で話すため、教師はジャワ語で答える。

### 高学年

- ・前の授業の続きから始まった。（前の時間の算数の続きをやって、理科に入った）
- ・算数の問題は が出てきており、少し難しいように思えた。
- ・ワークシートの紙など、紙面には困っていないようであった。
- ・教室にはたくさんの展示物があった。  
ex. グループワークで用いたワークシート、自分で考えた物語（作文みたいなもの）など
- ・ジャワ語で話す。

# 6. 参考資料

## Bousai sama sama Project 結果

1 班

問題点(1)

食べ物がない

問題への対策

外部からの支援物資を配分する

一緒に政府への支援の申込用紙を作る

みんなで協力して食べ物を与える

問題点(2)

ストレスがたまって、健康を崩す

問題点の理由を具体化したもの

また地震が起こらないか不安になる

家のものがなくならないか不安になる

問題への対策

地震についての正しい知識を授業で伝える

地震の体験がトラウマにならないよう、子どもを楽しませる

2班

問題点(1)

食糧がない

問題点の理由を  
具体化したもの

食糧が家の下敷き  
になる

店から店員が逃げてい  
ない、また、店に泥棒  
が入る可能性がある

問題への対策

家で作ってい  
る作物を近所  
に分ける

インスタント  
ヌードルやピ  
スケットをた  
めておく

青年団によ  
る自発的な  
見回り

問題点(2)

怪我をする

問題点の理由を  
具体化したもの

道が混んで、車同士が  
ぶつかる

津波が襲ってくると  
いう噂が流れる

問題への対策

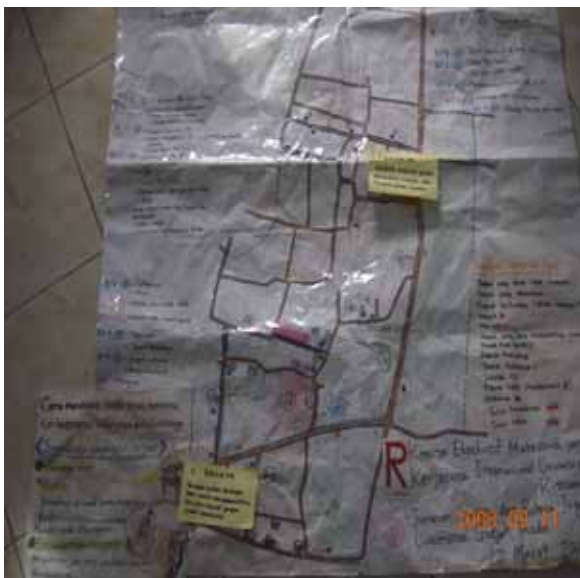
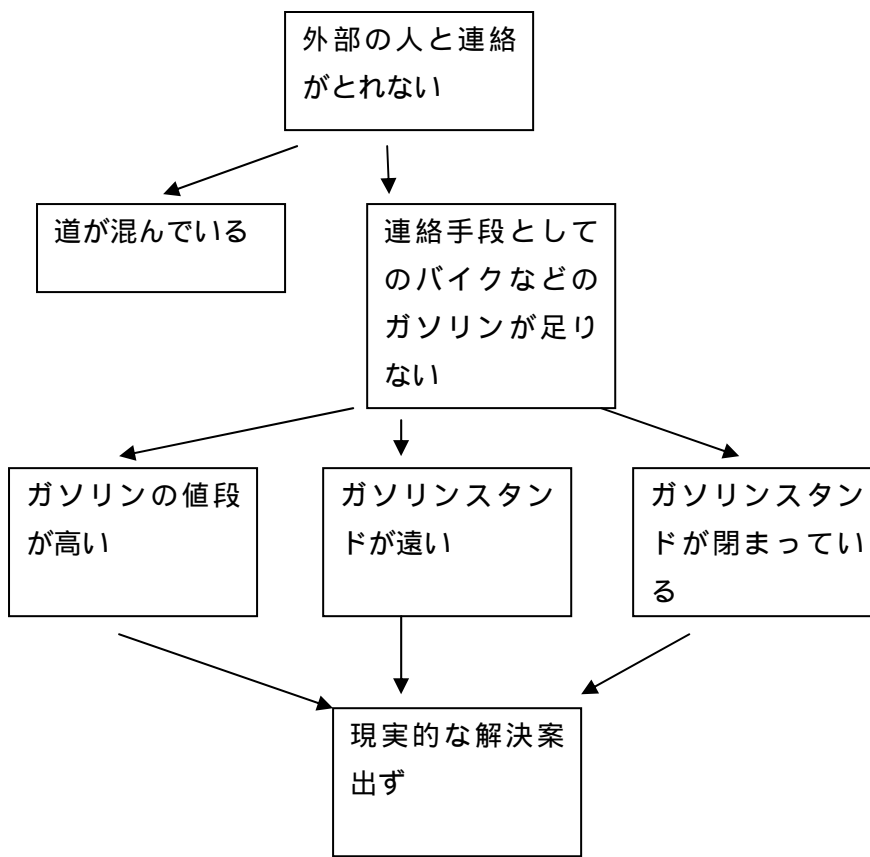
(怪我へ対処として) 1  
つの RT に一人薬箱を持  
っていれば良い。具体的  
には各 RT の人々からお  
金を集め、包帯・脱脂綿・  
消毒液(赤チン)が入っ  
ている 薬箱をポス・ロン  
ダに置く。

前回の被災の経  
験から、解決済み

問題点(3)

問題点の理由を  
具体化したもの

問題への対策



3班

問題点(1)

食べ物が無い

問題への対策

みんなで材料を持ち  
合い、小学校など  
の頑丈な建物で料  
理を作る

問題点(2)

健康を損なう

問題点の理由を  
具体化したもの

下痢や、咳、建物  
が崩れてきて怪  
我をする

問題への対策

プスkesmasで  
薬をもらう

病気が治せる人  
(MANTRI)に  
治療を頼む



## Kesehatan Project 調査結果

### 1. 学校での保健の取り組みについて

仮説1：SDでの保健の取り組みが行われていないのではないか？

#### 1-1 保健教育の有無

- ・保健体育の授業で健康・怪我への対処法を教えている。
- ・教師は保健所スタッフより、病気予防や怪我の対処法などについてレクチャーを受ける。

〔虫歯に関して〕

#### 現状

- ・Panjagan 郡全体をみると、大人に比べて子どもに虫歯が多い。(保健所への調査より)
- ・カラキジョ地区の住民13世帯中、5世帯の住民が虫歯にかかったことがある。(住民調査より)
- ・カラキジョ地区の子供はしっかり歯磨きをするから虫歯にならない。(PKKリーダー調査より)

#### カラキジョ地区での対策

- ・SDでは歯磨き教室を開催していない。歯科検診は年に1,2度実施している。  
小学生の頃に歯磨き教室を体験しているUGM学生がいる。(ジョグジャカルタ出身)
- ・保健所が年に2回の衛生教育を実施している。(対象者が児童or教師かは不明)
- ・PKKのミーティングで親に歯磨きの方法をレクチャーしている。

#### 【調査結果のまとめ】

- ・教師は怪我・健康に関する知識を児童に伝えている。
- ・児童に対して直接虫歯に関する知識を与える機会は少ない。  
(間接的な機会としてはPKK・保健所のレクチャーを挙げることができるが、効果は不明である)

#### 1-2 保健管理の有無

〔健康診断について〕

- ・毎年2回、健康診断を行う義務がある。(身長、体重、視力検査、歯科検診)
- ・診断記録は、学校と保健所の両方でとっておかなければならない。

〔保健室(UKS)に関して〕

- ・ベッド、救急キッドなどの設備は整っている。(見学より)  
ベッドの上に埃がたまっており、保健室はあまり使用されていない。
- ・UKSの管理をする教師は毎年交代し、そのたびに保健所から研修を受けている。

(研修の具体的内容は不明)

- ・ UGM 学生の出身校では養護の教師がいた。

〔弁当に関して〕

- ・ 学校近くの売店で児童が食べ物を買うことを禁止したため、児童は家から各自弁当を持参するようになった。しかし、弁当の衛生状態が悪い。教師は弁当の管理は親が行うものであるが、親に対して指導は特にしていないと言っていた。

### 1 - 3 子供の健康に対する教師の意識と知識の有無

- ・ 「ドクター・クチル」へ指導は SD の教師が行っている。  
ドクター・クチルとは、児童による保健係のことで、高学年の児童が 1 人担当する。保健の知識等を競う大会がある。

〔教師の発言〕

- ・ 子供の健康を守る上で必要なことは、主に両親が正しい知識を持つことと、教師が正しい知識を持つことである。
- ・ 両親に対する情報伝達は、教師自身が正しい知識をもっていないので行っていない。
- ・ 怪我に対応できる児童を増やしたい。この問題の原因は正しい知識をもった教師がいないことである。

【調査結果のまとめ】

- ・ ドクター・クチルへの指導を教師が行っている。  
ドクター・クチルの大会のための知識を教師方が持っていると言える。  
しかし、その知識がどのような内容かはわからない。  
教師が怪我や病気への対処方法について正しい知識をもっているかどうかは不明。

## 2. カラキジョ地区の対策設備・アクセス（距離、経済、信頼）

仮説 2: カラキジョ地区の医療設備・アクセスが住民にとって十分ではないのではないか？

### 2 - 1 距離的アクセスに関する問題

- ・ 地区内に病院、保健所はない。ただし、mantri (保健所に勤めているスタッフ) がおり、診察や薬を渡している。(有料)
- ・ Panjagan 郡・Guwosari 村の保健所は共にカラキジョ地区から車で 10 分程度の所にある。
- ・ バントゥル県の病院はカラキジョ地区から車で 15 分程度の所にある。
- ・ 保健所や病院にいったことがない人は 13 軒中 1 軒であった。(住民調査より)

### 2 - 2 経済的アクセスに関する問題

- ・ 診察料 (初診料) は 3,000 ルピアである。(医療従事者への調査より)

参考：カラキジョ地区の平均所得は月 785,000 ルピア（約 10,000 円）

調査した 13 世帯の内、収入の調査ができた家庭は 11 世帯である。その内、10 世帯は月収で、残り 1 世帯は日収で聴取した。

上記は 10 世帯の月収を万未満は四捨五入して求めた平均値である。

月収の最高は 1,645,700 ルピア、最低は 100,000 ルピアだった。

日収で返答された世帯は、日 5000 ルピアであった。

- ・ 貧困者のための保険証があり、これを使用すると診察料が無料になる。  
(以下、住民調査より) 薬代・注射代は別途かかる。保険証について、貧困者の定義など詳細は不明。
- ・ mantri では薬を 20,000 ルピアで渡している。
- ・ PKK のリーダーはバントゥル県の病院へメディカルチェック(有料)に行っている。(PKK 調査より)  
住民調査で、メディカルチェックを受けている人はいなかった。

#### 【調査結果のまとめ】

- ・ 保険証制度が機能しているのかどうかは今回の調査からは不明であった。
- ・ 経済状況によって治療を受けられる人、受けられない人がいるかどうかはわからなかった。

### 2-3 医療への信頼に関する問題

〔Panjagan 郡の保健所について〕

- ・ 築 1 年の施設で、診察室・研究室・薬部屋・緊急室・分娩室・料金場(カルテ保管)・カウンセリングルーム・ナース更衣室・患者用のトイレ・病食を作るキッチン・ムソラ(Mushola)・病室がある。
- ・ スタッフは総勢 39 名がシフト制で勤めている。

〔Guwosari 村の保健所について〕

- ・ 築 1 年の施設で、診察室、歯科診察室、受付オフィスあり。
- ・ 待合室なし。長椅子 1 脚、次の人が座る椅子 2 脚のみ。
- ・ 車は 2 台ほど止められる。
- ・ どちらの保健所かは不明だが住民はビタミン剤や貧血防止の薬、蚊よけの煙をもらった。

#### 【調査結果のまとめ】

UGM 学生の発言や見学結果より、カラキジョ地区の保健所は他のインドネシアの地域に比べて整っていると言える。

### 3. 情報発信の有無と住民の情報理解

仮説3: 病気の予防方法に関する情報の発信を、地域組織や医療従事者が行っていないのではないかと？

病気の予防方法に関する情報を、住民が理解していないのではないかと？

#### 3-1 情報の内容と伝達方法

〔PKK リーダーに関して〕

レクチャーで伝えていること

- ・家やトイレ、庭を清潔にすること

PKK のミーティングで伝えていること

- ・虫歯予防のために、子供に甘い食べ物食べないようにすること
- ・寝る前の歯磨きの必要性

〔医療従事者に関して〕

PKK へのレクチャーで伝えていること

- ・PKK のミーティングや SD、Pajangan 郡のホールでレクチャーを行っている。  
内容は、その時流行している病気や住民の要望を聞いて決める。今まで行ったレクチャーとして、「デング熱の予防方法（ex トイレの水を清潔に保つ、ビンや缶など水がたまってボウフラが発生しそうな場所を清潔に保つ）」などを行った。  
Pajangan 郡のホールで行うレクチャーは招待状をブスケスマスで配布している。  
今まで行ったレクチャー内容
- ・インフルエンザの予防方法（栄養のあるものを食べる、予防接種をする）
- ・デング熱の予防方法

Panjagan 郡の小学校で伝えていること

- ・歯磨きや半年に1回歯医者へ通うことの必要性

#### 【調査結果のまとめ】

- ・医療従事者は Panjagan 郡全体をみた時に危険な病気の予防法について、PKK リーダーは医療従事者から教えられたことについて、それぞれレクチャーしている。
- ・医療従事者は、レクチャーで以前感染症（インフルエンザ・デング熱）、妊婦や乳児の健康を守るための方法について伝えている。虫歯予防の方法に関しては小学校へ伝えている。

#### 3-2 住民の情報理解

保健所から得ている情報の内容

- ・鳥インフルエンザの予防方法
- ・デング熱の予防方法

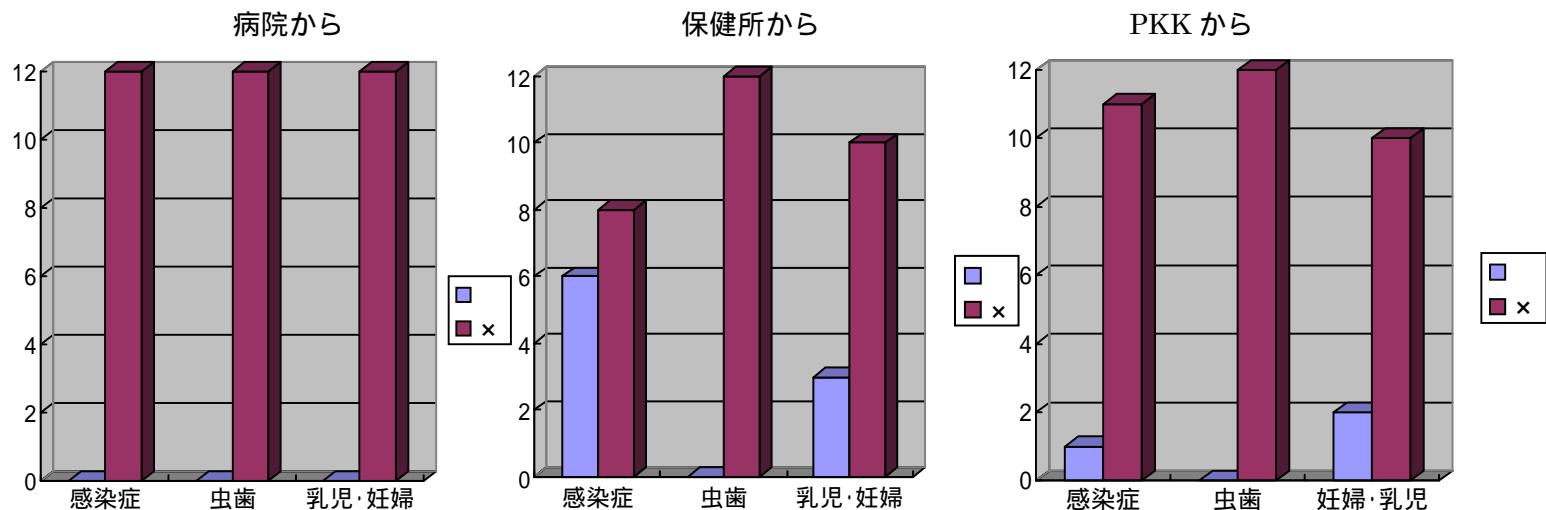
- ・ 伝統的な薬であるジャムー (jamu) の作り方
- ・ 子どもの食事についてのレクチャー

PKK から得ている情報の内容

- ・ 乳幼児の健康を守るための方法

以下の病気の予防方法をそれぞれの機関から得ているかどうか

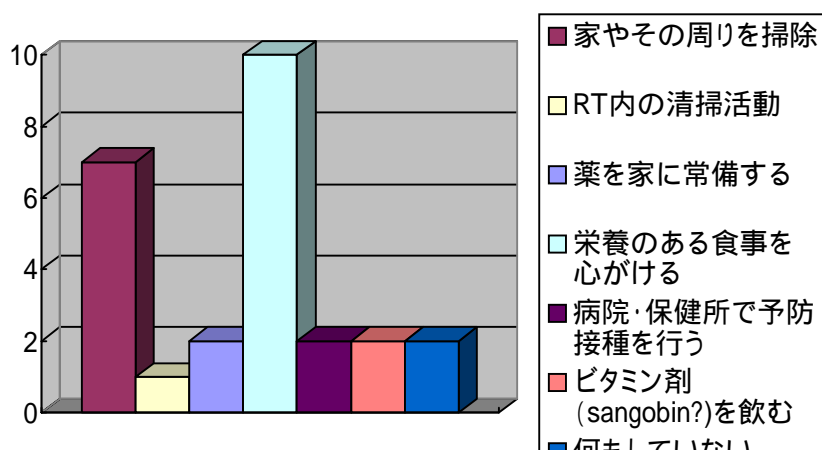
母体数は 13 世帯。ただし、サンプル数が少ないため、あくまで参考値とする。



4. 家庭における保健対策状況と病気

仮説 4: 住民の家庭で、健康を守るための対策が行われていないのではないか

4-1 住民の保健対策の有無



母体数は 13 世帯。ただし、サンプル数が少ないため、あくまで参考値とする。

- ・ 風邪やインフルエンザにかかった時に伝統的な方法(ジャムーという手作りの薬を飲む、ユーカリの葉を貼るなど)を用いている家庭があることがわかった。

### 【調査結果のまとめ】

- ・2軒以外は保健対策を行っている。また、伝統的な方法による治療方法がどの程度効果があるのかは不明だが、文化・慣習との兼ね合いがあるため問題点とは言い切れない。

## 5. 地域組織（PKK）の状況

### 仮説5：PKKが、地域の人々の健康のための活動を行っていないのではないか

#### 5-1 PKKの取り組みの有無

- ・栄養、保健所についてのミーティングを行っている（毎月20日のPKKミーティング）
- ・女性のための体操（毎週水曜日）

#### 〔ポシアンドゥについて〕

概要：PKKが経営する保健サービス・プログラム

対象者：母親、乳児、妊婦、一般女性、高齢者

#### 妊婦・乳児のためのポシアンドゥ

内容：乳児の健康診断（身長、体重、血圧の測定）

栄養のある食べ物（野菜、果物など）を提供する

レクチャー（保健所スタッフがグウォサリ村のPKKメンバーに対して毎月行うレクチャー）

妊婦の体操

\* 妊婦の体操以外はすべて同じ時間に行っている

#### 高齢者のためのポシアンドゥ

内容：健康診断

（血圧の測定が中心。測定の仕方がわからない人がいる場合は教えている）

健康に関する相談会（随時保健所で受けることができる）

栄養のある食べ物を提供する

#### その他

内容：ポウフラの検査を行い保健所へ報告

#### 5-2 地域の保健に関するPKKリーダーの意識

- ・人々健康を守る上で必要なことは
  - トイレを設置すること
  - 周り（特に家やトイレ、庭など）を清潔に保つこと
  - 体に良い食べ物を食べること
  - 子どもが寝る前に甘いものを食べない
  - 歯磨きをする

であると答えた。 ・ に関してはPKKのレクチャーで伝えている。 に関連して、栄養のある食べ物（野菜、果物など）を提供している。 ・ に関して、PKKミーティングで親にレクチャーしている。

#### 【調査結果のまとめ】

PKKリーダーが必要だと思うことと、PKKで実践している内容をあわせて考えると、必要だと思うことはPKKの取り組みとして実践していると言える。

## 6. 基本統計

### 6-1 水源の利用

パジャガン郡全体ではポンプ式の井戸が多い。カラキジョ地区では旧式の井戸が多い。

### 6-2 スタッフ数（詳細は資料集参考）

- ・ 医者：2人
- ・ 看護師：9人・ 歯科医：2人・ 歯科助手：2人
- ・ 助産師：8人・ 薬剤師：1人
- ・ スタッフ：15人

\* 39名がシフト制でグウォサリ村 のプスケスマスに行き、働いている。

### 6-3 乳幼児死亡率（2006年現在）\*1000人あたりの調査

	乳児死亡率	5歳未満児死亡率
インドネシア	26	34
日本	3	4

出典：世界保健機関〔WHO〕

<http://www.who.int/whosis/en/index.html> 最終閲覧日 2008/08/14

## Special Thanks

私達 CheRits の活動は多くの方々の協力のもとに成り立っています。  
今回のインドネシア訪問においても大変お世話になりました。  
一部の方となりますが、ここに記して感謝の意を表したいと思います。  
(順不同)

### 国内にて

中村 隆 先生

高見雄一 先生

岡本明子 先生

### インドネシアにて

SARE さん (カラキジョ地区リーダー)

Drs Susanto 先生 (SD Muhamadiyah 校長)



## 2008年夏 インドネシア訪問 報告書

---

2008年11月17日発行

**立命館大学国際部 国際協力学生実行委員会 <CheRits>**

編集者 妹尾有里子 / 古賀あすみ

発行者 高山千晴 (CheRits 代表)

発行所 立命館大学国際部 国際協力事業課

住所 京都市北区等持院北町 56-1

TEL 075-466-3320 FAX 075-466-3321

**立命館大学国際部 国際協力学生実行委員会 <CheRits>**

公式アドレス [remember\\_tsunami@yahoo.co.jp](mailto:remember_tsunami@yahoo.co.jp)

公式サイト <http://remembertsunami.web.fc2.com>

\* この報告書や CheRits に関するお問合わせは、上記公式アドレスまでお寄せ下さい